

平成30年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

ツガナ タニグチ イサオ
氏名 谷口 功

研究期間 平成30年度

研究課題名 信州の宿場の基層にみる持続的な都市に関する研究

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	谷口 功	人間関係学部	教授
研究分担者	杉藤 重信	人間関係学部	教授
研究分担者	宮下 十有	文化情報学部	准教授

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

木祖村の湯川酒造で造られている日進市の地酒「泉流（こうりゅう）」のルーツを探るということを契機に、2014年以降、毎年木祖村および長野県内の宿場を訪れ、酒造りと宿場の成り立ちの関係性を見出すことを試みてきた。本研究の目的は、信州に点在する宿場町の歴史的ネットワークと社会構造を、人々の日常的な暮らし（家庭生活・社会活動・経済活動）のなかで再定義することによって、都市の持続可能性と「近代都市」の原型となるものを見出すことにある。

2. 研究方法等 (300字程度で記述)

私たち研究グループは、まずは現地を訪れて、それがどのような場所でありどのような人々があるのか地域社会の存立にかかわっているのか確認することを大切にしている。信州に数多く存在する宿場の存立基盤に関して、商家や祭りの担い手へのヒアリングや歴史的資料の収集によって知見を整理している。2018年度は、新たに長野県中東部の長和町（長久保宿・和田宿）、中部の下諏訪町（下諏訪宿本陣）を訪れ、宿場や旅籠の歴史を学ぶとともに、現在の地域構造が抱える問題の抽出を試みた。また、毎年訪れている木祖村（藪原宿）と塩尻市（奈良井宿）にて鳥居峠（中山道）を挟んだ山林管理という視点から話をうかがい、さらには実際に歩くことによってその現場を確認し、あらためて社会構造と地域資源管理の連関について検討した。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

宿場町は、中世から近世において、流通の拡大とともに街道沿いに創設された集落都市である。宿場町は結節点として機能し、そしてその規模の違いはあれ現在にも残る。宿場町には必ずそれを支えるシステムがあった。いくつかの機能を有することによって都市として成立してきたと考える。

1つ目は、資源調達の機能である。江戸幕府は統治機構(藩)を形成する。参勤交代という各地方の大名を呼び寄せる仕組みをつくり、米によって経済を統制し、村請制という形で村にそれぞれ責任を負わせる仕組みをつくっていく。人夫、馬、米、酒、食料などの資源を周辺の村から調達し、また資源を商品化していくことによって宿場の機能を維持してきた。

2つ目は、宿場環境の整備・保全に関わる機能である。江戸幕府に忠誠するために、そしてスムーズに快適に大名たちに移動するために、宿場の環境整備がおこなわれてきた。そして、各地に「町並み」というものがつくられていくことになる。

3つ目は、秩序維持に関わる機能である。身分制によって社会的な役職・役割が与えられ、人々が組織化され、秩序が維持されることになる。

4つ目は、共同感情を創出する機能である。自由な宿場の空間の中で、身分を超えた自由な交流が起こる。また、祝祭や講といった共同性の基盤となる仕組みが用意されてされている。

このような機能によって宿場は定常的な社会を形成し、安定的な都市として持続していたと考える。宿場の社会構造の変遷・位相を整理することによって、近代都市の原型として宿場を位置付けることが可能だと考える。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①宿場	②都市	③システム	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

谷口功・宮下十有・杉藤重信、2019、「信州の街道をめぐる-システムとして宿場を考える-」、『椋山人間学研究』第14号、椋山人間学研究センター